

1777年、バルブ＝ニコル＝ポンサルダン（Barbe＝Nicole＝Ponsardin）がランス市のセレス街にて誕生。

1789年、フランス革命（～1799）勃発時、バルブ＝ニコル11歳。小柄で器量は十人並み、黄金色の髪と大きな灰色の眼をしたやや太りがちな真面目な少女は、ランス市で1, 2を争う有力実業家の長女だった。父ニコラは封建領主や貴族の娘達と共に教育を受けさせるため、娘を誉れ高きサン＝ピエール＝レ＝ダーム王立修道院に入れた。彼は野心的な男で、10年以上にわたり政界進出の下地を作り国王ルイ16世と王妃マリ・アントワネットの戴冠式を主催するランス市委員会に弱冠28歳で選出、式の立案に役目を果たした。

1798年、バルブ＝ニコル20歳で許婚のフランソワ・クリコと結婚。彼の父フィリップ・クリコ＝ムーリオンは1772年ランスに、多角事業会社「クリコ」を設立し、既に成功した繊維商人でワイン仲買業も営んでいた。非キリスト教化が進む中での宗教儀式は逮捕投獄確定の危険なものであったため、式は湿ったカーヴの中でこっそりと行われた。

1799年、結婚一年目、夫フランソワは父が20年以上前に始めた、友人知人に売る程度の小規模なワイン事業の拡大にバルブ＝ニコルと共に熱中する。会社はブドウ園を所有しており、その中には現在で言う「グラン・クリュ」も含まれていた。同年に女兒を出産。

1802年のロンドン進出失敗。1804年のロシア進出も悲惨な結果に終わる。

1805年、夫は鬱状態に陥り、徐々に悪化。最終的にチフス（語源は「煙」を意味するギリシア語。不安感、絶望感はその症状）により死亡。バルブ＝ニコル27歳。ナポレオン法典の下にある当時は、既婚者の女性実業家は夫の許しがなければ契約書の1枚も書けない影のような存在であった。夫を失うことで、女性達は決定権を得ることができた。悲しくも未亡人（ヴーヴ）となることで、自分の事業を経営する社会的自由が保障されたのである。現代ビジネスの最初の女性の一人となる。

1806年、父と同世代の知人、アレクサンドル・ジェローム・フルノーと契約を結ぶ。彼は裕福な繊維商人であると同時にワイン生産にも携わっていた。ここでクリコ家は繊維事業から正式に撤退。新会社「ヴーヴ・クリコ・フルノー商会」を立ち上げる。しかし戦争による貿易の不自由、加えて海賊の脅威、同業者ジャン＝レミ・モエへの競争心。その後、オランダのアムステルダムでの全面的損失と失敗が続く。

1807年、露仏友好条約の兆し。貿易制限解除への期待。

1808年、ロシアでの大きな需要、及び国内での好評。顧客の認識は「ヴーヴ・クリコ」だけになり、社のネームブランドが上昇する。

1809年、ヨーロッパ財政破綻寸前の危機により、貿易の停止、港の封鎖。

1810年、アレクサンドルとの契約期限。彼は社の将来性を見出せず撤退を選ぶ（その後彼は息子のジェロームとテタンジェ社の前身を作る）。バルブ＝ニコルは本当に自分一人でやらなければならなくなった。社名を「ヴーヴ・クリコ・ポンサルダン」とする。そして地域初の記録されたヴィンテージシャンパーニュを造ることで、革新的な力を証明。父、皇帝ナポレオンの勅令によりランス市長に就任。しかしバルブ＝ニコルは、皇帝の戦争とモエへの支援、加えてジャクソンに対する寵愛を見て、敵意を抱く。

1811年、大彗星の通過。当時の迷信的恐怖から、人々は大きな変化と帝国崩壊の前兆を噂する。一方ぶどうの収穫は完璧。それを讃え、ワイン生産者は、勿論バルブ＝ニコルもまた、自社の商標を放棄し「ヴァン・ド・ラ・コメット」なる彗星マークの焼き印をコルクに押す。(尚、ヴーヴ・クリコのマークに取り入れられた彗星のモチーフは、幸運の星として、その後ずっとこのメゾンの運命を見守ってきた)

1813年、父、皇帝の加護のもと、男爵となる。ロシア軍のシャンパーニュ地方への進行、エペルネ占拠。ジャン＝レミ・モエはカーヴを略奪され50万本以上のシャンパーニュを失う。一方フランスでは紳士の指揮官の計らいにより略奪は禁止され、大抵の場合ロシア人はバルブ＝ニコルのワインを購入した。皮肉な事にこの戦争はシャンパーニュ地方にとって、ロシアへの素晴らしいマーケティングの機会となった。

1814年、ナポレオンの権力剥奪、皇帝退位。シャンパーニュ地方にて戦争が終結する。バルブ＝ニコルは国際貿易の復活に先駆け、海上封鎖をかいくぐり、即ち大量の商品を法的許可も保険もない、失敗したら一巻の終わりの危険を冒し、ワインをロシアへ発送。その背景には、ロシアでのシャンパーニュの禁止(ナポレオンのシャンパーニュ産業の擁護を破壊する目的)は、その反動により歓迎される筈と見て、他社を出し抜き先手をつ打つことで、市場を独占するという大きな目論見があった。競争相手は誰もこの計画を察知せず、ロシアではワイン商人の間で熱狂的な競争を巻き起こした。

1815年、この秘策とバルブ＝ニコルの大勝利は実業界の伝説となり、「ヴーヴ・クリコ」はヨーロッパの殆どで発泡性ワインの同義語となった。1811年の彗星ヴィンテージはプロイセン王の誕生祝いでも使われた。一方この年は凶作、市場での供給不足が確実視された。

1816年、在庫を全て売り切ってしまったクリコ商会には早急にシャンパーニュが必要であった。しかし上等なワインには時間が掛かる。唯一の希望はワインの澱抜きに伴う、うんざりする程の遅延の解決策を見付けることであった。2次発酵から生じるどろどろの層を取り除く伝統的な方法には欠点があった。ワインを別のボトルに詰め替えると、泡の一部が駄目になり、上等のワインが大量に無駄になった。ボトルを上下に振って澱を抜く技術は莫大な経費と途方もない時間がかかった。卵の白身や骨髄のゼラチンで作られた清澄剤「コル」は品質を損なう。カーヴの職人達に嘲笑われながらも、バルブ＝ニコルは自分の頑丈な調理台をカーヴに運び込み、ボトルのネックを傾けて挿すのに丁度良い大きさの穴を幾つか開けさせた。これがPupitre(ピュピトル:澱下げ台、「デスク」の意)の原型である。職人の親方で協力者のアントワーヌ・ミュレルと共に、ボトルを毎日回転させ、叩いて、澱を瓶首の方に移動させる実験を続けた。そして僅か6週間後、コルクを素早く弾き出すことで、ワインに何の害も与えず、また面倒な作業もなしで澱が全て噴き出し、透明なシャンパーニュが出来ることを発見した。このRemuage(ルミュアージュ:動瓶)の成功は競争相手への圧倒的な優位を意味したため、社員の忠誠心や気前の良い利益分割体制の効果により、その後ほぼ10年間も秘密にされていた。ジャン＝レミ・モエがこの技術を採用したのはようやく1832年のことであった。因みに1830年代には地方全域でA字型のピュピトルが使用されるようになった。

1817年、バルブ＝ニコルは17歳の娘クレマンティーヌをルイ・マリ＝ジョゼフ・シュヴィニエ伯爵と結婚させる。貴族の称号を得ることは抜け目のないマーケティング戦略で

あった。

1818年、プレイボーイでギャンブラーのルイの気紛れな願いを拒否できず、バルブ＝ニコルは社交界の客を持て成す為の別荘の城を、エペルネから西へ10km程の村ブルソーに建てる。

1819年、夫の父であり支援者でもあったフィリップ・クリコ死去。

1820年、父ニコラ死去。バルブ＝ニコルは信頼できる男性の二人ともをいきなり失う。

1826年、甥アドリアン、狂犬に襲われ死亡。ポンサルダンの家系はここで途絶える。

1827年、フランスの景気後退。

1829年、フランスの経済危機、本格的な恐慌。

1830年、オルレアン公ルイ＝フィリップが王として統治。

1831年、王の支援でシャンパーニュ産業が劇的に発展。バルブ＝ニコルはシャンパーニュの新たな成長を感じ取り、新パートナーとしてエドゥアール・ヴェルレと組む。これ以降、社名は「ヴーヴ・クリコ・ポンサルダン・エ・ヴェルレ商会」となる。

1837年、母ジャンヌ＝クレマンティーヌ逝去。

1839年、孫娘マリ＝クレマンティーヌに結婚祝いとして、ブルソーの城を与える。

1841年、バルブ＝ニコルは64歳で引退、ブルソー城で孫や曾孫との生活を送る。しかし実際は仕事中毒で、「その魂はすべて事業の中にあり、最後まで毎日、自分の名を冠した商店の帳簿を細かく調べ続けた」

1843年、ブルソーの城を新しく建設すべく、建築家ジャン＝ジャック・アルヴフ＝フランスカンと共に設計、1850年に完成。それはロワールの城々を模倣したルネサンス様式で、周囲には広大な庭園がある、円筒形の小塔を頂いた真っ白な宮殿であった。

1850年代、コレラの流行などにより、孫娘マリの3人の子の内2人が幼くして死亡。残る1人も感染、回復はしたが後遺症が残る。不幸が立て続けに家庭を襲った。そしてこの時期に、画家のレオン・コニエによって有名な彼女の肖像画は描かれた。微笑みの影さえ見られないのは、この家庭内の悲劇が原因とも想像される。

1860年、イギリス人の嗜好に合わせ、ルイーゼ・ポメリーが今日の「ブリュット」スタイルを発明、国際的な名声を博す。そしてヴーヴ・クリコはメゾンの伝統を離れなければならないことを悟り、ロシア人好みの甘くて強いタイプから、イギリス市場向けの辛口の軽いドライタイプへと変更する。これは明るい黄色のラベルで宣伝された。

1863年、一人娘のクレマンティーヌ死亡。

1860年代、レオン・コニエによる2枚目の肖像画が製作された。バルブ＝ニコルの足元には14歳になる曾孫娘アンヌがいる。この最後に生き残った曾孫に宛てて、「愛しい子よ」と、マダム・クリコはこの様に書いた。

あなたに秘密をひとつ教えましょう・・・これほど度胸の良いあなた、あなたは誰よりも私に似ています。それは私の長い人生で、私にとってとはとても役に立った貴重な性格でした・・・私は現在、シャンパーニュの偉大な貴婦人(La Grande Dame)と呼ばれています！自分の周りをご覧ください・・・世界は絶えず動いています。私たちは明日の物事に投資しなければなりません。他人よりも先に行かなければならない。決意を固め、厳格でありな

さい。そしてあなたの知性をあなたの人生の導き手となさい。大胆に行動しなさい。もしかしたらあなたも有名になれるかもしれません・・・

1866年、ブルソー城にてバルブ＝ニコル逝去、享年89（因みに当時のフランス女性の平均寿命は45歳以下。またブルソー城は売却後、第1次、2次大戦では軍の病院として使用。現在はシャンパーニュ Chateau de Boursault が城の周りの畑で作られ、城内のセラーで熟成されている。尚、城内には所有者の許可なく立ち入ることは出来ず、塀で囲まれた屋敷林の周囲を巡る細い田舎道から、ちらりと望むことしか出来ない）

1877年、マダム・クリコの後継者エドゥアール・ヴェルレは、「V. Clicquot. P. Werle」イエローラベルの商標を登録する。黄色の色調は徐々に濃くなっていくが、それは暗いセラーの中で、セラーマスターがドライワインとブリュットワインを見分けやすくするためであった。

1945年、ベルトラン・ド・マン伯爵の働きかけにより、ブリュットワインのラベルは独特なトレードマーク「クリコイエロー」になり、現在もこの「トウモロコシを餌にした有名なブレス鳥の卵黄の色」はヴーヴ・クリコを一目で見分けるための特徴となっている。

（因みにヴーヴ・クリコの錨のマークは、キリスト教で希望と厳格さを象徴し、1798年に創設者フィリップ・クリコが選んだものである。ラベルが登場する以前は、コルクに記されたブランドがシャンパーニュを見分ける唯一の印であった。希望の象徴として、錨は新たに設立した自社の繁栄を信じる若き企業家にとって、理想的な図案であった。1805年にクリコの経営を引き継いだマダム・クリコも同じコルクを使い続けた。何世紀にもわたり錨マークを使い続けるヴーヴ・クリコは、創設当時の信念に今も忠実であり続けている）

1987年、LVMH（ルイ・ヴィトン・モエ・ヘネシー）傘下に入り、その後は世界各国の市場で積極的に販売網を広げ、イギリスのエリザベス2世の御用達の指名を受けるなど、世界有数のシャンパーニュブランドとして君臨する。（参考として、万人志向のモエ、ポメリーはステンレスタンクでストックしたワインをブレンド。クリュッグ、ボランジェは強い個性を求め小樽熟成。ヴーヴ・クリコは25～40%とレゼルヴワインをしっかりと含む、ピノ・ノワール高比率の、50のキュヴェをブレンド）

2009年、日本法人の業務清算に伴い、イギリスのディアジオとの合併会社であるMHD（モエ・ヘネシー・ディアジオ）から発売されることとなった。

2010年、バルト海オーランド諸島にて沈没船発見。168本のシャンパーニュが引き上げられ、内47本がヴーヴ・クリコであった。ミュズレが見当たらないことから1840年頃の物と推定。沈んでいた位置は塩分濃度が低いためコルクダメージが少なく、1年を通して水温が約4度、水深40mは瓶内にかかる5気圧と近いため、170年の熟成にも関わらずフレッシュな味わいを保っていたという。これを機に、VCP社は「オーランド・ヴォールト」と名付けたコンテナを沈めてシャンパーニュを熟成させるプログラム「Cellar in the sea」を開始した。今後は数年ごとに試飲し、その経過を見ていくという。

マダム・クリコが事業を始めた時には年間売り上げ実績は5万本、死亡した時には300万本にまで成長。現在ヴーヴ・クリコのシャンパーニュは、マダムの信念「品質はただひ

とつ、最高級だけ」をモットーに、年間平均出荷数 900 万本、ストックは 3 億 2 千万本を誇る巨大メゾンとして、世界 120 か国以上で販売されている。

the widow:champagne. [From 'Veuve Cliquot' ,the name of a firm of winemERCHANTS.]
The Oxford English Dictionary

参考文献 『シャンパーニュの帝国 ヴーヴ・クリコという女の物語』
ティラー・J・マツエオ著 北代美和子訳
『シャンパンのすべて』山本博